

# 南海道支道と庄園

―新島庄勝浦地の位置づけをめぐる―

丸山 幸彦

## 第一章 勝浦地をめぐる

吉野川下流域の阿波国名方郡の低湿地上にある新島庄は本庄地区、枚方地区、大豆処地区という数キロごとに離れて所在する三つの庄地から成り立っていた<sup>\*1</sup>。しかしこの庄には四番目の庄地が存在する。それが「勝浦地」である。この庄地が最初にあらわれるのは承和年間における東大寺の庄園回復運動にかかわる史料においてである。さらに後に一〇世紀になって、寛和年間に「勝浦庄」という名前が新島庄・枚方庄とならんであらわれており、一〇世紀にいたるまで存続していたことがあきらかになる<sup>\*2</sup>。このように長く存続したにもかかわらず、この地区については下記の史料しかまとまったものはない<sup>\*3</sup>。

阿波国牒 東大寺衙

不得勘徴圃地子事

一新嶋地壹拾町參段壹百六十四歩

…略…

一大豆津圃參町貳段

…略…

一勝浦郡地參拾九町

右地、自昔為江湖、公私無利、不由徴地子、使等所明、

以前等畠地子、依去九月七日牒狀可勘徴、而載校田目録言上、官即被下省符、猶為口分、須來校圃之時除置之、奉寄寺家、承前国司等收公班民既了、今時吏非所知、但縁事仏事、來年可改之入寺、仍具事狀、即附廻使豊貞等、以牒

承和十一年十月十一日

…下略…

この国牒については別に分析したように<sup>\*4</sup>、八世紀中期に設定された新島庄の回復をねらった東大寺の庄園回復運動が承和七年以後展開されていく一環として出されたものであり、新島庄を構成する諸地区それぞれについて東大寺が要求を出したことに対する阿波国司の回答である。「新島地」（本庄地区）と「大豆津圃」（大豆処地区）と「勝浦地」の三者が項目として立てられており、前二者については官省符で庄園と確認されながらもまだ口分田になっている両地区内の耕地を次の校・班田に際して東大寺寺田にすることを約束しているものである<sup>\*5</sup>。

この国牒から少なくとも次の二点は確認できる。その第一点は九世紀半ば時点では勝浦地区をふくむ四つの地区が新島庄を構成していた、つまり勝浦地区は他の三地区と不可分に結びつけられて一括して扱われている存在であるということである。後の一〇世紀の寛和年間の史料では「寺家符 新嶋・勝浦・枚方等庄々」とあり、それぞれが自立をした庄園として扱われているような状況が出てきているが、これは少なくとも九世紀半ばまでは一括して扱われていた四つの地区が、一〇世紀後半には個々に扱われるようになったことをしめすものであり、勝浦地区に限ったことではない。

第二点はその位置についてである。勝浦地というその名称から見て、新島庄を構成する他の三地区がいずれも名方郡に所在するのに対してこの地区が郡境を越えて勝浦郡内に位置していることは確実である。上記史料によると、ここは昔から「江洲」となっている地であるとされているから、具体的には勝浦郡を流れている勝浦川ぞいの低湿地上に位置しているとみてよい。勝浦川は徳島市の飯谷地区を抜けると低地地帯に入る。この飯谷地区以東の紀伊水道にいたるまでの勝浦川の流路について、現在の流路は一七世紀の藩政時代に固定したものであるが、それまでは流路は現在の徳島市から小松島市にかけて乱流をくり返していた。つまり勝浦川は吉野川と同じくその河口部に無数の川が乱流する広大な低湿地を形成しているのである。勝浦地を飯谷地区より上の中流域の勝浦盆地やさらにその上流に求めることは「江州」という低湿地を表現した言葉を用いていることから見て無理があり、やはり飯谷地区より下流のこの低湿地帯に求められるべきであろう\*。

この二点をふまえると、勝浦地については次の諸点が問題として残さ

れていることになる。その第一点はこの地区の成立時期についてである。上記の国牒にはこの地区がいつ成立したかは明記していない。ただ、新島庄は天平勝宝元年(七四九)から占点が始まり天平勝宝八年(七五六)に立券がなされているが、一〇世紀末の欠年月日「東大寺領諸国庄家田地目録」\*には「新島庄八十四町三段七十五歩：右庄田地川成荒廢」とあり、この面積が立券完了時点の新島庄の面積を指すと考えられる。そしてこの面積は本庄・大豆処・枚方の三地区面積の合計にほぼ同じであり、三〇余町にのぼる勝浦地はふくまれていない。つまり、新島庄は天平勝宝八年に三地区からなる庄園として立券され、勝浦地は後になってつけ加えられているのであるが、その時点を特定できないかということである。第二点は勝浦地がこのように新島庄三地区の成立後につけ加えられたとするならば、その設定の目的は何であったかについてである。これは勝浦地のみが名方郡内に設定されず、郡境を越えて勝浦郡内に設定された理由は何であったかということも深くかわる。

以上の二つの問題は相互に深くかわりあっているが、とくに注目したいのは古代阿波の交通路と勝浦地をふくめた新島庄とのかかわりについてである。古代阿波の交通路については①吉野川、②南海道、③南海道支道の三者が主要なものとみてよく、このうち①の吉野川については、阿波を東西に貫く水上交通路の大動脈となっていることはいままでもない。また②の南海道については延喜式記載の駅としては阿波では石隈駅と郡頭駅があらわれている\*。一般的には石隈駅は現在の鳴門市撫養町木津に、郡頭駅は鳴門市大麻町郡頭に比定されている\*。この郡頭駅から南海道は逢坂山を越えて讃岐にむかうとともに、この駅から阿波国府に向かう陸上交通路も分岐している。

そして③の南海道支道はやはり撫養を起点に板野・名方・勝浦・那賀諸郡を抜けて土佐に向かう。この支道は養老二年（七一八）に伊予国經由土佐国への駅路以外に阿波国から土佐国へ直接通じる駅路として併設され<sup>\*10</sup>、以後延暦一五年（七九六）に廃止されるまで存続したものである<sup>\*11</sup>。①の延喜式記載の二つの駅は延暦年間の支道廃止後にあらわれたものであるが<sup>\*12</sup>、この阿讃山麓沿いの二つの駅はそれ以前の支道存続の時点にも存在していたとみてよい。つまり八世紀初頭以来木津をふくめた撫養の地に置かれていた南海道の四国における起点としての後の石隈に該当する駅<sup>\*13</sup>を出発点に一本は讃岐にぬける道、もう一本は土佐にぬける道が存在したのである。

これら三本の交通路は①②が名方・板野・麻植・美馬（後の三好郡をふくむ）諸郡から構成される阿波国の北半分をカバーし、③が勝浦・那賀（後の海部郡を含む）から構成される阿波国南半分をカバーしている。とみてよいが、注意しておきたいのは大豆処地区は南海道の郡頭駅と阿波国府を結んで吉野川河口低湿地上を南北に走る陸上交通路と吉野川とがクロスする大豆津という①および②とかわる交通の要衝の地に船の発着が可能な港湾機能をもつ庄地として設定されていたことである<sup>\*14</sup>。他の二地区も船運で大豆処地区と結びつけられており、三地区全体として大豆津という交通の要衝の地を中心にして存在しているとしてよいのである、そのことと対応させると勝浦地が名方郡の境を越えてより紀伊水道に近い勝浦川河口に設定されているのは③の南海道支道と関係をもっている故であるとみざるをえないのである。以下この勝浦地について③の南海道支道そのもののあり方について検討した上で、それとのかわりで勝浦地がどのような目的で郡境を越えてまで新島庄の第四番目

の庄地として設定されたのかについて検討していきたい。

## 第二章 南海道支道をめぐって

### 第一節 那賀郡所在の駅について

本章では撫養を出発点に土佐に達する南海道支道について検討していく。

南海道支道がどこを通るかについては研究史の上で国道195号線（那賀川をさかのぼる山間部の道）説と国道55号線（現在の海部郡内の海沿いの道）説とが対立していた。しかし、近時出土点数が増加している平城京出土の那賀郡関係木簡の検討により那賀川河口地帯に所在する薩麻駅と牟岐に所在する武芸駅という二つの駅が存在が明らかになり、この駅路道は海岸沿いの55号線ルートをとっていたことは確実になった<sup>\*15</sup>。

これら那賀郡関係木簡群は八世紀前半という時点における南海道支道ないしそこに位置する駅の性格について、豊かな事実を提供している。以下それについてみておきたい。とりあげたい木簡は次のものである。イ、平城京発掘調査出土木簡概報によると平城京内裏東外郭とその東方にある官衙とに挟まれた東大溝SD二七〇〇から次のような木簡が出土している<sup>\*16</sup>。

イー1 阿波国那賀郡武芸駅子戸主生部東方戸同部毛人 調堅魚六斤

天平七年十月

口、さらに同概報によると、上記東大溝SD二七〇〇の西壁で検出した溝状の堆積SX一二九一三・一二九一五から一〇点の木簡（その内

の一点は削屑）が出土しており<sup>\*17</sup>、釈文には次の八点が掲げられている<sup>\*18</sup>。

SX一二九一三出土木簡

ロ一1 □郡□（小力）城郷新□

ロ一2 因幡国巨濃郡潮井郷河会里物部黒麻呂中男作物海藻六斤 天平七年七月

ロ一3 阿波国那賀郡薩麻駅子戸鵜甘部□麻呂戸同部牛調堅魚六斤「平七」

ロ一4 阿波国那賀郡□□郷□□里戸主鵜甘□□伎□「

ロ一5 □子安曇部久爾戸同遠堅魚六斤天平七年十月

SX一二九一五出土木簡

ロ一6 ・主殿寮□□□□□□「

・右八月二十日申送□□国「」立丁二人□□□

ロ一7 阿波国□□「」□部千国調堅魚六斤□□□十月□

ロ一8 大公国 □

八点のうち、3、4の二点は那賀郡関係木簡である。また5と7については郡名ないしは国・郡名が不詳であるが、いずれも3との記載様式の類似から見て那賀郡関係木簡とみてよい。また薩麻駅に関する木簡を含むこの口群は上記イの武芸駅関係木簡と同一の溝から出土しており、年紀および内容とも深くかわっているところからみて、同一群を構成する木簡とみておきたい。

ハ、二条大路木簡からは那賀郡関係のものとして次のような木簡が出土している<sup>\*19</sup>。

ハ一1 阿波国那賀郡播羅郷海部里戸主安曇部大嶋戸同部若麻呂調御取

鮑「六斤天平七年十月」

二条大路木簡には約四〇〇点の海産物がその大半をしめる諸国の貢進物の荷札がふくまれており、天平七年（七三五）の年紀をもつものが多い<sup>\*20</sup>。この那賀郡関係木簡もその一点である。

以上のイ・ハの三グループの木簡一〇点のうち那賀郡関係の木簡は六点になるが、それについてあらためて整理しておく。

1（イ一1）、阿波国那賀郡武芸駅子戸主生部東方戸同部毛人 調堅魚六斤 天平七年十月

武芸駅の駅子が貢進した調に付された荷札である。「武芸」は現在の牟岐であることはまちがいないだろう。

2（ロ一3）、阿波国那賀郡薩麻駅子戸鵜甘部□麻呂戸同部牛調堅魚六斤「平七」

那賀郡薩麻駅の駅子が出した調に付された荷札。年紀は1と同じ天平七年一〇月とみてよい。薩麻という地名は現在では残っていない。

3（ロ一5）、□子安曇部久爾戸同遠堅魚六斤 天平七年十月

「□子」について、2木簡で薩麻駅の駅子が、1木簡で武芸駅の駅子がそれぞれ調として堅魚を負担しており、この3の場合もこれを「駅子」と読んでよいであろう。その場合どの駅の駅子かは不明であるが、2の薩麻駅駅子の木簡と同時出土しており、薩麻駅の駅子である可能性が高い。

4（ハ一1）、阿波国那賀郡播羅郷海部里戸主安曇部大嶋戸同部若麻呂調御取鮑「六斤天平七年十月」

播羅郷については、一〇世紀にだされた『和名抄』のなかに那賀郡を構成する一郷としてあらわれている。ただ、ここでみておきたいのは天

平七年の郷里制が行われていた時点での下に「海部里」という行政区分が存在していることである。

5（ロー4）、阿波国那賀郡□□郷□□里戸主鵜甘□□伎□□

郷名と里名が読めていないが、「鵜甘□□」は2木簡にあらわれる鵜甘部氏とみてよいであろうし、年紀も同じく天平七年一〇月とみてよい。

6（ロー7）、阿波国□□「□□部千国調堅魚六斤□□□□十月□□

ロの木簡群の一点であり堅魚に付されているところからみて、那賀郡の調関係木簡とみてよい。年紀も天平七年一〇月と読めるであろう。

以上の六點の木簡のうち、1については武芸駅駅子にかかわる木簡であり、2は薩麻駅駅子にかかわる木簡である。そして3については2と同じく薩麻駅駅子にかかわる木簡とみてよいであろう。また4と5について、書式がまったく同じであることに注意したい。5の郷と里の名前が読めていないが、書式の点からいって4と同じく播羅郷海部里であろう。その点で二つの木簡は播羅郷海部里関係木簡として一括しうる。また6については、欠字が多いが、天平七年一〇月の那賀郡関係の二つの駅ないし播羅郷海部里にかかわるものであることはまちがいない。

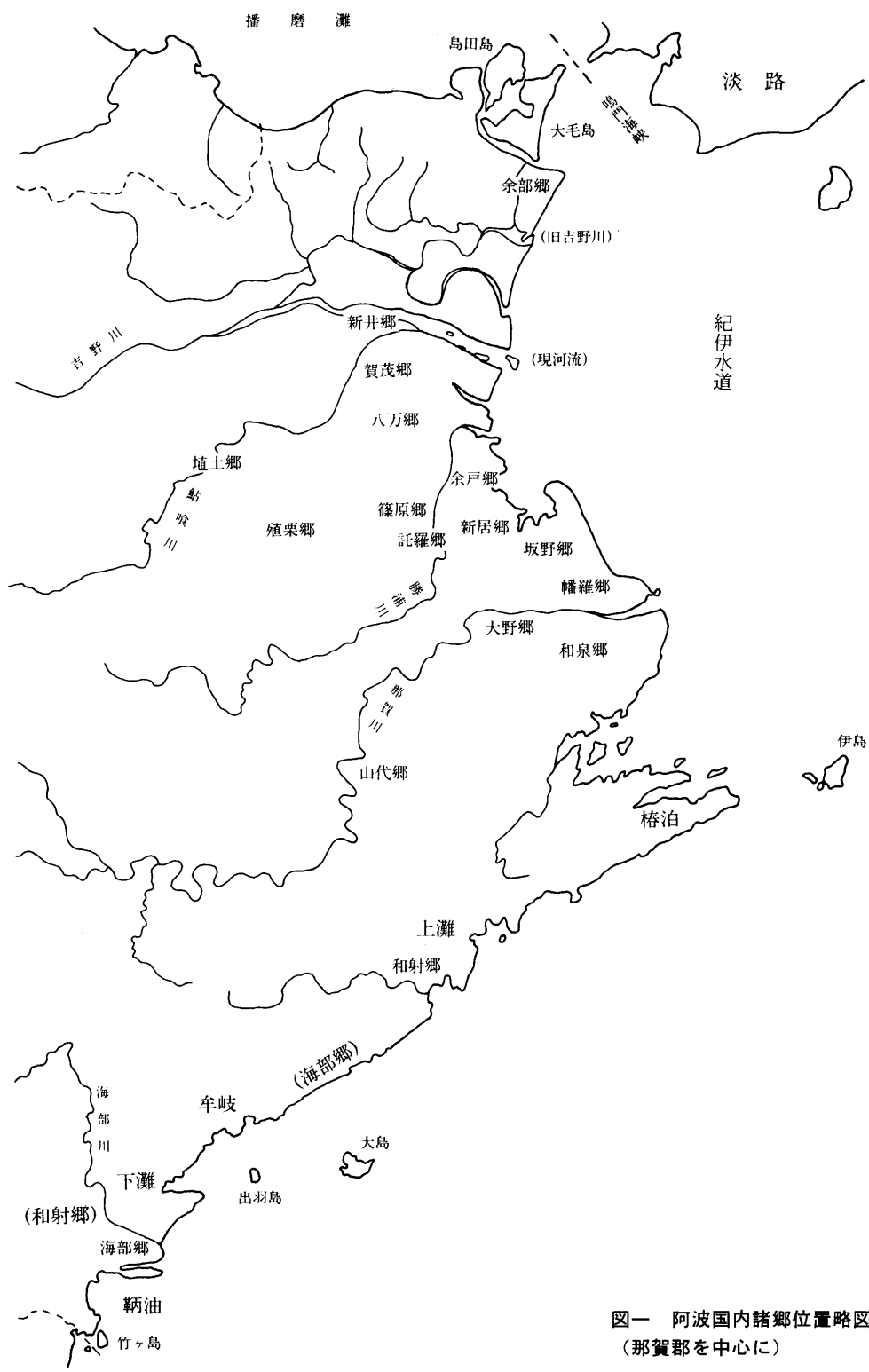
すなわちこの六點の木簡は天平七年一〇月という同一時点に作成された武芸駅および薩麻駅関係木簡と播羅郷海部里関係木簡の三つに分類できる。この武芸駅、薩麻駅および播羅郷海部里の三者は従来その存在を知られていなかったものである。以下、二つの駅とその背後に広がる海の世界についてみていきたい。

まず薩麻駅について、薩麻という地名が残っていないためこの駅の所在地は特定できない。ただ、最近那賀郡相生町竹ヶ谷地区に「薩摩」という地名が現存しているところから、この那賀川の上流の山間部に求め

る説がだされたが<sup>\*21</sup>、これについては疑問がある。『相生町誌』によると、竹ヶ谷の部落の境界については明治九年（一八七六）に当時の伍長吉岡田蔵が谷や稜線を境界として、出羽・越後・…・薩摩・美濃と部落を東部の北岸から一巡する形に区画命名したとある<sup>\*22</sup>。つまり薩摩という地名は近代になってからつけられたもので、古代にまでさかのぼりえないものとみるべきである。

より注目すべきは、薩麻駅と播羅郷海部里とのかかわりについてである。上記したように2および3の薩麻駅関係木簡からこの駅の駅子として鵜甘部氏（木簡2）と安曇部氏（木簡3）とがいたことがあきらかになる。一方海部里関係木簡から海部里の戸にやはり安曇部氏（木簡4）と鵜甘部氏（木簡5）とがいたことが明らかになる<sup>\*23</sup>。さらに木簡6について、「□□部千国」とあるが、先にみたように上記いずれかのグループに属するとみうるので、安曇部氏か鵜甘部氏のいずれかと読んでよいであろう。つまり6の木簡も薩麻駅ないし播羅郷海部里のいずれかに安曇部氏か鵜甘部氏がかかわっているとしてよい。このように鵜甘部氏と安曇部氏とが薩麻駅駅子および播羅郷海部里の戸主・戸口として共通してあらわれているということからみて、薩麻駅は播羅郷海部里の内部に所在していると把握してよいものと考ええる。

それではより具体的に播羅郷海部里はどこに位置していたのか。図一を参照しながら考えてみたい<sup>\*24</sup>。播羅郷については一〇世紀に出された『和名抄』に那賀郡八郷（山代・大野・嶋根・和泉（出水）・坂野・播羅・和射（知射）・海部）のうちのひとつとしてあらわれている<sup>\*25</sup>。この郷は原村という藩政村が当該地の内部にふくまれていることなどから那賀川河口デルタ地帯北部に広がるとされている<sup>\*26</sup>。ただ、この郷に



図一 阿波国内諸郷位置略図  
(那賀郡を中心に)

については上記の播羅郷関係木簡とは別に下記の木簡が長屋王家出土木簡のなかに所在する

7、阿波国長郡波羅里黒米五斗<sup>\*27</sup>

付札木簡における国郡里の表記については、靈龜元年（七一五）以前は「国郡里」、それ以後天平二二年（七四〇）までが「国郡郷里」、それ以後は「国郡郷」とする定説にほぼ一致することはすでに指摘されている<sup>\*28</sup>。長屋王木簡は和銅四年（七一）―靈龜二年（七一六）の間の

ものであり<sup>\*29</sup>、上記木簡には年紀が入っていないが、天平七年をさかのぼる約二〇年の七一〇年代に作られたものであることは動かない。木簡7にあらわれる国郡里段階の播羅里は国郡郷里および国郡郷段階の播羅郷と対応するものとみてよく、七一〇年代の播羅里と七三〇年代の播羅郷とでは那賀川河口デルタ地帯北部というその広がりには大きな変動はなかったと考えられる。このように同一郷（里）内から七一〇年代には米が貢進され、約二〇年後の天平七年には郷のもとでの行政区分としての海部里があらわれそこから海産物が貢進されているところからみて、天平七年の時点では海部里とならんで播羅郷内の農業生産（水田耕作）が行われている地においては海部里とは別な里が数個組織され、そこから米など農産物が貢進されているとみてよからう。すなわち播羅郷には複数の里が組織されているのであり、そのうち海辺で活動する戸が海部里に編成されているのである。

上記木簡4と同じ二条大路木簡に、「伊予国伊与郡石井郷海部里阿曇部太隅鯛楚割六斤」<sup>\*30</sup>とある。この伊予国の石井郷も海部里も後の和名抄にはあらわれていないが、郡郷里段階でやはり石井郷内の海沿いの地で海部里の編成がなされているのである。このことからみて海沿いの地

で海を活動舞台としている戸・戸口を海部里という形で編成するのは各地でみられたことであり、播羅郷海部里も那賀川河口デルタ地帯先端部の海に近い部分で海を活動舞台にしている戸を組織してなりたっている存在とみてよい。そしてこの海部里を構成する戸である安曇部氏・鵜甘部氏が薩麻駅駅子ともあらわれているのであり、その点で薩麻駅は那賀川河口デルタ地帯北部の海沿いの地、海部里内部に所在する津に設定されていたとしてよいのである。

次に武芸駅について、その名前からみてこの駅が現在の海部郡牟岐町に位置することはまちがいない。ここは牟岐湾に面しており、「兵庫北関入船納帳」にも「牟木」などしてあらわれているように室町期には港として発達している地である<sup>\*31</sup>。上記の木簡で古代においてここに駅が置かれていたこと、つまり薩麻駅と同じく海辺の津に設定されていることが明確になった。ここで問題になるのはこの武芸駅が天平七年段階でどの郷・里に属していたのかについてである。牟岐は由岐・日和佐・牟岐の各地で構成される上灘の一角に所在する。上灘については日和佐という地名が郷名に関連することから『大日本地名辞書』<sup>\*32</sup>以来の通説として和名抄所載の和射郷にあたると考えられてきた。また関連して和名抄所載の海部郷については海部川流域を中心とした下灘すなわち現在の海南町・海部町・穴喰町に比定されてきた<sup>\*33</sup>。それを前提とするならば、武芸駅は和射郷内に位置していたことになる。ところでこの和射郷については次の二点の木簡が注目される。

8、長郡和社里白米五斗<sup>\*34</sup>

9、阿波国那賀郡中男海藻六斤 和射<sup>\*35</sup>

8の長屋王家木簡にあらわれる「和社」は「和射」と同じとみてよい

であろう。この和射(社)里は先にみた同じ長屋王木簡にあらわれる播羅里と同じく和名抄の和射郷と対応する存在とみてよい。時期も同じ七一〇年代のものである。また9の木簡について、この木簡はSD二七〇〇のIV層から出土している。SD二七〇〇のⅢ・Ⅳ層出土木簡は年紀のあるものは天平勝宝・天平宝字に限られているところからみて<sup>36</sup>、上掲木簡も七五〇・六〇年代のものとみてよいであろう。七四〇年代以降は「郡郷」段階に入っているのも、この「和射」も和名抄の和射郷に対応する存在とみてよい。つまり和射郷については「郡里」段階の七一〇年代には米が貢進されており「郡郷」段階の七五〇年代には海産物が中男作物として貢進されているのである。

このことは先に見た那賀川河口デルタ地帯に広がる播羅郷と同じく和射郷についても天平七年段階の「郡郷里」段階では海辺に位置し海を活動舞台とする人々が構成する里と、平野部に位置し農業生産に従事する人々が構成する里(単数ないし複数)とから成り立っていたことをしめすものである。そしてそうなるにあつた問題になるのは和射郷の広がりについてである。通説のように上灘Ⅱ和射、下灘Ⅱ海部ということにした場合、上灘地方は四国山地がそのまま海に達しており、いうに足る平地はないことに注意したい。すなわち八世紀前半という段階に限定した場合、8の長屋王木簡の存在からみて、和射郷(里)はその内部に白米を産出する平野地帯をふくんでいることが明確である以上、和射郷(里)の広がりを水田地帯が入る余地のない上灘地方に限定して考えることは不自然ということになる。

では八世紀前・中期の段階の和射郷の広がりをどのようにみるべきか。それについて通説においては海部郷の郷域とされる下灘地方について、

現在の海部町に那佐湾という地名が存在していること、さらに延喜式内社の一つの和奈佐意曾神社<sup>37</sup>は現在の海南町大字大里に鎮座する八幡神社であるが、慶長九年(一六〇四)以前は現海部町鞆浦那佐港に鎮座していたことに注目したい。那佐浦は『阿波風土記逸文』に「奈佐の浦」としてあらわれており<sup>38</sup>、下灘地方に属する那佐湾ぞいの地は古代においては和那佐・奈佐と呼ばれていたことはまちがいない。そしてこの和那佐・奈佐が和名抄や木簡にあらわれている郷名としての和射(社)と深くかわるのであり、和射にかかわる地名は上灘に限定されているのではなく下灘にもかかわっているのである。このような下灘地方における和射関係地名の広がりを考慮するならば、定説のように和名抄にあらわれている和射郷・海部郷の広がりについて、単純に上灘地域が和射郷に、下灘地域が海部郷にそれぞれ対応するというものでは解釈がつかなくなるのである。これについて、那賀郡と紀伊水道を越えた対岸に位置する紀伊国海部郡との対比で問題を考えてみたい。

従来から紀伊国海部郡は①現和歌山市北西部の加太・木の本・雑賀地区、②現海草郡下津町と有田市初島町の下津・初島地区、③現日高郡由良町の衣奈・由良地区の三つの地区からなりたっており、三地区とも紀伊水道に臨み、突出した半島部などをふくんでいるが、海草郡・名賀郡などといった内陸部の諸郡の海沿いの地を切り取る形で紀伊水道ぞいに北の加太から南の由良までベルト状にのびているとされ、そして①が和名抄の加太郷のおよその広がりを、②が浜中郷のおよその広がりを、さらに③が余部郷のおよその広がりをそれぞれしめすとされてきている<sup>39</sup>。

ところが①の加太郷について、近時刊行された『和歌山県史、原始・



古代編』<sup>\*40</sup>が八世紀前期のこの郷の広がりが見和歌山市加太から少なくとも現海南市黒江にまでおよんでいたことを、神亀五年（七二八）の木簡に「可太郷黒江里」<sup>\*41</sup>があらわれていることにもとづいて指摘していることに注目したい。この指摘によると広大な紀ノ川の河口全体が加太郷のなかにふくまれる、すなわち河口に点在する陸地の人間居住地を結び形で郷が成り立っていることになる。つまり従来は紀ノ川河口北岸に限定されて考えられていた加太郷の広がりが見和歌山市黒江にまでおよんでいたことが明らかになったのである。

さらにもう一つ注意したいのは同じ『和歌山県史・原始・古代編』によると、八世紀前半の時点で紀伊国海部郡には木本郷（現在の和歌山市木本）が所在していたが、この郷は紀ノ川北岸の加太寄りの海沿いの地であり、この時点大安寺の所領が所在しており、加太郷の広がりの中に割り込む形で所在していることになること、つまり加太郷は木本郷によりその広がりを見分断されていることについてである<sup>\*42</sup>。

このように紀伊水道沿いの海辺部に展開する加太郷は海を活動舞台にする人々の居住地を結び形で細長く延び、かつ他郷により分断されている郷であるということを見分断され、阿波国那賀郡海部郷にもどる。すでに『阿南市史』第一巻は現阿南市福井町椿地に寿永年号を持つ板碑があり、それに「阿波国海部郡福井里」<sup>\*43</sup>とあり、かつ福井が那賀郡から海部郡が分離した後は那賀郡に属する地であることにもとづいて、古代の海部郷の広がりを見下灘地域に限定するのではなく、上灘地域から一部は現在の阿南市の南部（福井付近）までをふくむ海岸地帯一帯ではなかったかという見方もあるとしている<sup>\*44</sup>。つまり海部郷Ⅱ下灘、和射郷Ⅱ上灘という通説を否定する見方が提出されているのである。本稿ではこの阿

南市史で出されている考え方をさらに押し進め、和名抄にあらわれている那賀郡海部郷の広がりについて、それを現在の下灘地域とみるのではなく対岸の加太郷と同様に那賀川河口の北方から土佐国境にいたる那賀郡の海岸線全域、すなわち那賀郡の他の六郷の海沿いの部分を切り取る形で紀伊水道ぞいに細長く延びているという特異な形態をとって成立している郷とする見方を提出しておきたい。またそれと関連して和射郷の広がりについてもすべて山と海で成り立っている上灘地域に対応させるのではなく、従来の通説では海部郷とされている大里古墳群の分布をみる海部川流域の平野部を中心に広がっていたとみておきたい<sup>\*45</sup>。

このようにみることで、先に見た和射郷からは七一〇年代に白米貢進がなされていることについても、海部川流域の平野地帯から貢進されたとみることができるのである。もちろん、八世紀前・中期の段階では那賀川河口北岸に広がる播磨郷が海にまで達しておりその海沿いが海部里になっていること、および和射郷についても七五〇年代に中男作物として海産物がこの郷から貢進されており、和射郷も一部海に面していると推測されることなどからみて、海部郷の広がりには八世紀前・中期の段階では対岸の紀伊国海部郡加太郷と同様に、他郷の広がりで見分断されていた可能性が高いこともみておきたい。和名抄の那賀郡の項で海部郷は和射郷の次、那賀郡の最後尾に記されているが、これについても従来那賀郡の南端の郷が海部郷であること、いいかえれば郡南端の下灘地域が海部郷であり、その北の上灘地域に和射郷が広がることを意味するとされてきた。しかしそうではなく海部郷は他の諸郷の海辺部分を切り取る形で成立しているというその形態が他の諸郷と異なるというその特異性により末尾に記されているものとみておきたい<sup>\*46</sup>。

ただ紀伊国海部郡の場合、和名抄の段階では加太郷は記載されているが本郷は姿を消している。このことは和歌山県史も指摘しているように加太郷に吸収された、すなわち八世紀中期以後一〇世紀にいたる間に郷の整理・統合がなされているのである<sup>\*47</sup>。同様なことは阿波国那賀郡でもいえるかもしれない。すなわち、八世紀中期までは諸郷の海辺部分で分断されていた海部郷も、一〇世紀段階では諸郷の海辺の部分を吸収し那賀郡の海辺部分全体にわたりベルト状に延びている郷に整理・統合されているというような郷の広がりの変遷があった可能性は見ておいた方がよいであろう。

武芸駅にもどると、この駅が現在の牟岐であることは動かない。問題は天平七年という郡郷里段階において、この駅がどの郷に属していたのかであるが、いままでみてきたことをふまえるならば、上灘・下灘両者を含む郷としての和射郷内の複数の里の一つであり海辺で活動する人々が作っている里に所在するとみるか、あるいは海沿いに延びる海部郷のうちの一つの里に所在するとみるかいずれかであろうが、後者の可能性が高いという指摘に止めておきたい。

## 第二節 南海道支道と水駅

以上二つの駅が那賀郡の海辺部の海部郷ないし海部里内の津に置かれていたことをみてきた。周知のように、駅は中央と各国府を結合する各駅路上に一定区間ごとに設置され、各駅二〇疋から五疋の駅馬と、駅長を頂点に一般公民とは別に編戸された、駅馬数と同数の駅戸で構成されている。駅馬の数は、大路の山陽道は二〇疋、中路の東海道などは一〇

疋であり、それ以外の小路は五疋とされている。駅子は駅長が統率するが駅馬の飼育、使者の次の駅までの送り届け、乗具および蓑笠などの準備を任務としており、そのため駅子に徭役（庸と雑役）、駅長には課役（租・調・庸・雑役）負担が免除されていた<sup>\*48</sup>。薩麻駅の場合は鞆甘部氏・安曇部氏姓の少なくとも二つの戸が駅戸としてあらわれているし、武芸駅の場合は生部氏が駅戸としてあらわれている。いずれも調を出しており、彼らが徭役を免除された駅戸（駅戸の場合は調はだす義務がある）として組織されている人々とみてよい。

ただこの那賀郡の二つの駅を陸上交通のための駅とみてよいかどうか問題になる。国道55号線ぞいの上灘地域は四国山地がそのまま海に落ち込む険阻な地形になっている。那賀川河口の薩麻駅から牟岐にある武芸駅までの陸路は存在したのであるが（近世では土佐街道が走っている）、その道は人や物資を運搬するに適しているとはいえない。武芸駅より南の土佐に達するまでの陸路にも多くの難所がある。それ以上にみておきたいのは上記二つの駅の駅子が「調」として海産物を出していることである。つまりこの二つの駅の駅子は紀伊水道を活動舞台としている存在であり、陸上での馬を用いた交通・運輸に従事している者とはみなしがたいのである。それらの点からみて、この駅は厩牧令水駅条に「凡水駅不配馬処、量閑繁駅別置船四隻以下二隻以上、随船配丁、駅准陸路置」<sup>\*49</sup>と規定されている水駅とみなすべきものと考ええる。

水駅については坂本太郎・新野直吉・松原弘宣諸氏の研究があるが<sup>\*50</sup>、それによると我が国にはほとんどその例がなく、わずかに『延喜式』兵部省諸国駅伝馬条にあらわれる出羽国最上川・雄物川沿いの駅がそれに該当するのみであるとされている<sup>\*51</sup>。また、出羽国以外では

松原氏が大同三年（八〇六）に廃止された円山川ぞいの但馬国高田駅を水駅と見る説を出している<sup>\*52</sup>。木簡にあらわれている那賀郡の二つの駅に船が置かれていたという直接の証拠はないが、駅子が調を海産物で貢進しており、かれらが船を利用して交通・運輸業にたずさわっている水夫とみなしうるし、さらにその地形からみて駅と駅とを結ぶのは馬ではなく船であったとみることは十分可能である。

このように二つの駅を津に設定された水駅とみなした場合、この駅が南海道支道沿いに設定された駅の一つであるので、あらためて南海道支道そのものの性格が問われることになる。それについて『阿波国風土記逸文』に「中湖トイフハ、牟夜戸与奥湖中ニ在ルガ故、中湖ヲ為名、見阿波国風土記」<sup>\*53</sup>とある。ここで「湖」は「みなと」と読んでおり、要するに八世紀一〇年代に作られた阿波国風土記に阿波の三つの津（港）があらわれているということであり、以下この三つの津に注目したい。

三つの津のうち牟夜戸については鳴門海峡に面する撫養を指すことは諸説一致しているが、中湖・奥湖の位置について一般的に中湖は小松島、奥湖は橘湾ないし椿泊に比定してきた<sup>\*54</sup>。それに対して『日本古典文学大系』では、中湖を吉野川河口中央部、奥湖を吉野川河口南端に位置づけている<sup>\*55</sup>。これについて検討してみると、一般的に近世以降の阿波について、吉野川流域を北方（藍どころ）、勝浦川・那賀川流域を南方（田どころ）と区分してきた。しかし中世以前の阿波ということで巨視的にみるならば、北から順に紀伊水道に流れ込んでいる吉野川・園瀬川・勝浦川の三川はその河口部分は入り組み合っており、板野・名方・勝浦三郡にまたがる連続して広がる低湿地を形成している。そして那賀郡に入ると那賀川・桑野川が再び広大な低湿地をその河口に作り上げて

いる。すなわち、北は鳴門海峡に面する撫養から南は橘湾・椿泊にいたる紀伊水道ぞいに五つの河川が作り上げる基本的には連続している広大な低湿地（それが阿波の平野の世界の主要部分を形成する）が存在していた。以上のことを念頭におくと、通説は三つの津は北端の撫養を起点に阿波の海沿いの平野全体に配置されているとみていることになるし、古典文学大系説は三つの津を平野地帯北部すなわち吉野川・園瀬川・勝浦川流域に限定して配置されているとみていることになる。

いずれをとるべきかについて、この場合古典文学大系説のように三つの津を平野北部に限定して把握する必然性はないのであり、やはり三つの津は撫養を北端に橘湾・椿泊を南端にする阿波の平野の世界全体を代表する港であるゆえに風土記に記載されているとみた方が妥当と考える。すなわち、橘湾・椿泊は広大な平野の世界と山がそのまま海になだれこむ上灘・下灘などの海の世界との境に位置するのであり、平野の世界の北端の撫養と対極をなす存在になっている。その点からいって、ここに奥湖という津の所在を推定するのは合理性がある。そして中湖については牟夜戸と奥湖という二つの津が阿波の平野の世界の北端と南端とにそれぞれ設定されているとみなすならば、その二つの津の中間に位置し、かつ阿波の平野の北部地帯と南部地帯との中間に位置することになる小松島をふくむ勝浦川ないし園瀬川河口地帯に比定される津とみることは合理性があるといえる。

このように七一〇年代阿波の海沿いの地には本土への玄関口であり板野郡（阿讃山脈山麓の平野部）を後背地にもつ撫養津、阿波の平野部の北部と南部との中間に位置し勝浦川流域の平野を後背地にもつ中湖、阿波の平野部と阿波の南部の海の世界の堺の地に位置し那賀川流域の平野

を後背地にもつ奥湖という三つの津が存在したとみてよいのであるが、このような津の連なりが撫養から椿泊に達してそこで終わっているということは考えられないのであり、それからさらに南の海の世界すなわち現在の上灘・下灘をへて土佐国境に達する要所要所（たとえば、日和佐・牟岐・鞆浦などの地）に津がありそれらが結びつけられて阿波北部の撫養から土佐に達する紀伊水道沿いの水上交通路が八世紀前半には存在していたと見てよいのである。上記三つの津はこのような阿波と土佐とを結ぶ水上交通路上の阿波における重要な津であったゆえに風土記に記されたのであろう。

同じ七一〇年代、新たに阿波から土佐に抜ける南海道支道が設定される。その際、この三つの津をふくめ津を結んで撫養から土佐に達していた水上交通路がそのまま利用され、それら津のうちのいくつかに水駅を置かれるということで駅路道が作られていたのであろう。薩麻駅や武芸駅はこのときにそれぞれの所在する津に設置されたものである。風土記にあらわれる三つの津にもそれがこのルート上の有力な津であることからみて、水駅がおかれていたことはまちがいない。従来南海道支道と風土記にあらわれている三つの津とのかわりについては、前者を水上交通路とみていなかったこともあって論ぜられることはなかったが、両者は密接に関連していたとみてよいのである。

以下これら水駅のおかれていた津のあり方について、八世紀中・後期の瀬戸内海に面する播磨国赤穂郡との対比でみておく。赤穂郡の北部は山陽道が通る水田地帯であるが、瀬戸内海に直接面した南部は山が直接海に迫り、耕地がほとんどない典型的な海の世界を形成している。そしてこの海沿いの地（現在の赤穂市域）は坂越郷という行政区画のもとで

律令国家に把握されている。この坂越郷の地には千種川河口の赤穂津や、さらにそこから山一つ越えたところの坂越の津などいくつかの津が所在しており、八世紀中・後期の時点ではこの津を窓口到他国他郡から塩生産に従事する技術者が流入してきて塩生産活動を展開していた。造東大寺司の塩山などは津に流入してきているこれら技術者を組織する形で塩生産を行っているのである<sup>\*56</sup>。そしてこのような海辺の郷である坂越郷は七九〇年代にはその下に神戸里という行政単位があらわれており、坂越郷と神戸里それぞれに刀祢がおり、両者あわせて坂越郷・神戸里の「村里刀祢」の集団を形成している<sup>\*57</sup>。そしてこのなかに「里長」「収納長」および「津長」があらわれている。この集団が坂越郷を統括しているのであるが、とくに津長についていうならば、坂越郷という海の世界は津を窓口海上交通あるいは河川交通で他地域と結びついているのであり、津長は津にかかわってそこを拠点に活動する諸集団を統括する存在とみてよい。

このような瀬戸内海沿いの坂越郷のあり方は撫養から土佐国境にいたる海沿いの地にベルト状にのびる、そこに津がおかれている阿波の海の世界のあり方と基本的に同じとみてよい。阿波の平野北部北端に位置する牟夜戸（撫養津）についてみると、平城京から「阿波国進上御贄若海藻菟竈 板野郡牟屋海」という天平一七年（七四五）から一九九年にかけて作成されたものと推定してよい木簡が出土している<sup>\*58</sup>。撫養については和名抄の津屋郷に含まれるとされるが<sup>\*59</sup>、その内部に位置する撫養について郡郷段階になっている天平一七〜一九年においては「牟屋海」と呼ばれていることがこの木簡からあきらかになる。小鳴門海峡やウチの海などの複雑に入り組む水路やそのあいだに点在する島々から成り

立っている海の世界これが牟屋海であり、ここには漁業を含めた水産業、さらには津を拠点にしたさまざまな形で水運業などに従事する人々が居住している。風土記にあらわれている「牟屋戸」は小鳴門海峡を指すとされているが、おそらく海峡のいずれかの部分に讃岐に向かう陸路の南海道の起点になるとともに、土佐に向かう水上交通路の起点にもなる津が所在していたのであろう。なお、郡・郷・里段階においてはこの津は薩麻駅が那賀郡播磨郷のうちでも海辺にあった海部里にあったと考えられる津に所在していたと同じように津屋郷を構成する複数の里のうちの海辺部の里に所在していたとみてよい。

同じ北海道支道上に位置する中湖・奥湖もこれと同じような場に所在していたとみるべきであり、それぞれの津の所在する村里には津を管理する津長や調・贄の徴収の責任者である収納使などをふくめた村里刀祢集団が存在し、それが統括している。そしてこれら海辺の村里はそれぞれが孤立しているのではなく、村里内部の津を拠点にして船による人的・物的な交流がなされており、このような村里内部の津を結ぶ形で水上交通路が紀伊水道沿いに撫養から土佐国境まで達していたのである。

このように水上交通路としての北海道支道は海の世界の村里内部に所在する津を相互に結び合わせていた水上交通ルートを上から把握しなおしそれを整備する形で作られていたが、武芸・薩麻両駅の駅戸が調として堅魚をだしていることにしめされるように、それぞれの津に置かれる駅は海を活動の舞台としている村里の構成員を駅長・駅子に組織することと成り立っているのである。駅長には村里刀祢クラスが起用され、そのもとに駅子が組織されて、その集団が水駅相互を結んで活動しているであろう。さらにこのような駅路道の整備に際して完全な水上交通路

のみではなく、部分的には令に規定されている陸上路も利用される船馬併置の駅が作られていたことも十分考えられるところである<sup>\*60</sup>。いづれにせよ、古代日本における主として水運により支えられている駅路道については、内陸部の川沿いのルートについての存在が指摘されているのみであり、海の世界に展開する村里と村里刀祢に支えられた、海上交通路としての長距離にわたる駅路道の存在が北海道支道という形で明確に浮かび上がっている点は注目されてよい<sup>\*61</sup>。

### 第三章 勝浦地の位置およびその経営のあり方

以上北海道支道が板野・名方・勝浦・那賀諸郡の海辺の村里に位置する津を結んで走る水上交通路であることをみてきた。それをふまえて本章では第一に新島庄の一地区としての勝浦地がこの北海道支道とどのようにかかわって設定されていたのか、第二にそのようにして設定された勝浦地はどのような形で開発・経営がなされていたのかについて、みていきたい。

#### 第一節 勝浦地の位置

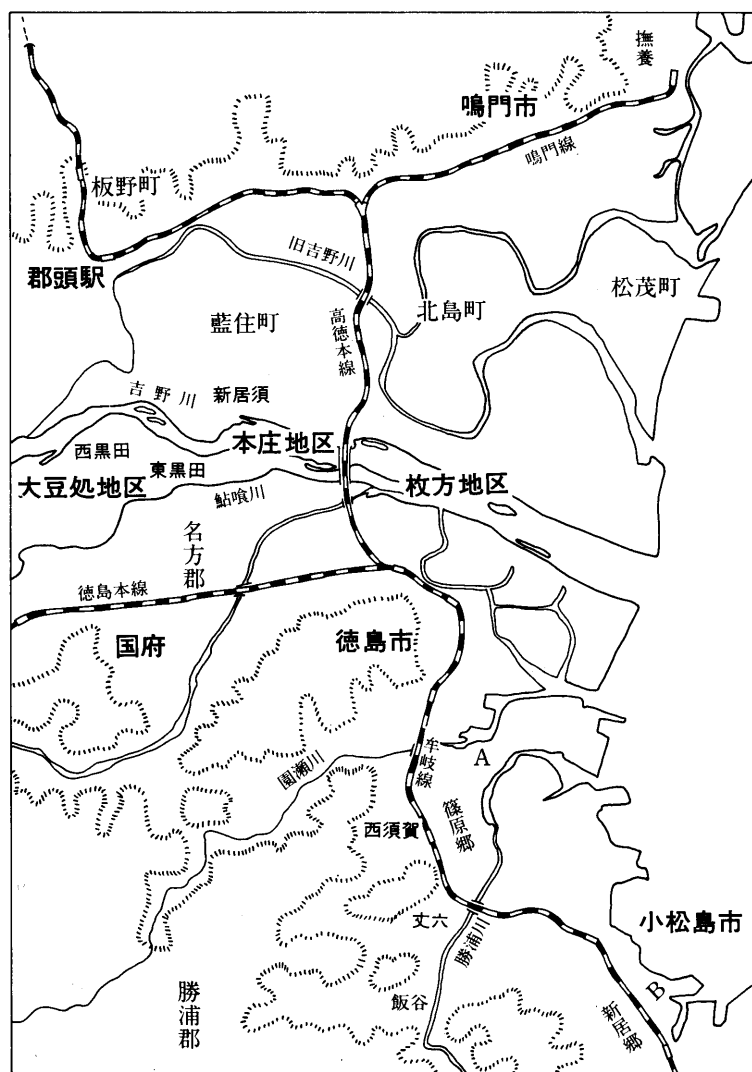
北海道支道を水上交通路とみた上であらためて新島庄の所在する吉野川・園瀬川・勝浦川河口地帯すなわち阿波の平野北部地帯についてみると、この地帯の北端に位置し、北海道・同支道の出発点になっている牟屋戸（撫養津）、平野北部地帯の南端に位置し那賀川河口を中心に広がる阿波の平野地帯南部への入り口にもなっている北海道支道沿いの中湖、

および吉野川沿いに位置して国府外港の役割を果たすとともに吉野川中・上流域地帯への入り口になっている大豆津の三つの津が国府所在地をふくむ古代阿波のもっとも中心を構成するこの地域における水上交通の要衝の津として浮かび上がってくる(図二参照)。

そして先にみたように、成立当初の新島庄三地区のうち大豆処地区(大豆津圃)が大豆津に置かれており、他の二地区はこの地区より下流方向すなわち紀伊水道の方向に所在しているが、大豆処地区と水上交通で接

する名方・板野・阿波・麻植・美馬諸郡に及んでいることになる。しかし大豆津におかれた大豆処地区がカバールうるのは、この吉野川流域のみであり、那賀川流域を中心にした阿波の南部にまではおよびていない。新島庄が阿波一国全体の造東大寺司が必要とする物資の集積を行うという機能を果たすためには、交通路とのかかわりでいえば阿波南部に向かう南海道支道とのかかわりでこの庄地設定が必要であった。そのことをふまえると、新島庄の第四番目の庄地が設定されるとすれば、

津を窓口となっていてる場に位置している。この大豆津は名方郡側でいえば気延山の麓に広がる国府・石井地域という阿波でもっとも古くから開けている水田地帯と道で直接結び付き国府外港としての役割をも果たしているとともに、板野郡とも陸上交通路で連絡すること南海道と吉野川とを結びつけている津である。それ故大豆処地区は造東大寺司が必要とするその地域の生産物を封戸からの徴税あるいは交易などの手段で集め搬出するという交通・運輸・交易の拠点としての機能を果たす存在とみた場合、その活動の対象となる地域は南海道と吉野川を媒介にして吉野川下流域の平野の世界および吉野川上流域の西部の山の世界を力



図二 新島庄諸地区配置略図  
(A・Bは勝浦地の推定所在地)

それは南海道支道上の津であり阿波の南部への入り口を押さえている中湖にかかわってなされたとみるのが妥当であろう。つまり、大豆津にかかわって新島庄の大豆処地区が設定されたのと同じように、勝浦川河口に所在する中湖にかかわって新島庄の勝浦地が設定されたとみたい。

中湖に勝浦地が設定されたことにより、東大寺が板野郡とならんで那賀郡にもつ封戸五〇戸<sup>\*62</sup>からの封物もわざわざ大豆処地区に送らなくても、この勝浦地を経由して東大寺に運ぶことが可能になる。また那賀川平野の産物さらにその先の奥湖を越えた海の世界の産物の集積も可能になる。つまり、勝浦地の設置は造東大寺司が新島庄を拠点に阿波国内で行っている必要物資の集積・搬出活動の幅を一挙に広げるのであり、阿波・板野・名方など諸郡からなる吉野川流域のみを活動の対象としている状況から、勝浦郡やさらに南の那賀郡をもふくめた阿波国全体に活動が及ぶことになるのである。

ただ、この中湖の所在地については勝浦川の乱流ということと明らかに正確には把握しがたい。具体的に勝浦地について一〇世紀には勝浦庄と呼ばれていたことに焦点をあてると、次のような推定が成り立つ。すなわち一〇世紀末には新島庄全体が姿を消していくなかでこの地区も姿を消すが、平安末期からかわって仁和寺領勝浦本庄や高野山領勝浦庄が姿をあらわしてくる。前者は篠原庄とも呼ばれており、古代の勝浦郡篠原郷に比定される。篠原郷については「日本地理志料」<sup>\*63</sup>は勝浦川が低地にでてまもない徳島市丈六町・飯谷町付近一帯に比定しており、「大日本地名辞書」<sup>\*64</sup>はそれよりやや下流の旧勝占村にあたる徳島市大谷町・北山町・論田町・大原町に比定している。やや食い違いはあるが、本庄という地名が丈六町に残っており、篠原庄は丈六町を中心に広がって

いることになる。また、高野山領勝浦庄は勝浦本庄（篠原庄）と地理的にほとんど重なって存在しており、その庄域は小松島市田野町から徳島市丈六町・勝占町にまで及んでいたと考えられる<sup>\*65</sup>。これら中世の勝浦本庄（篠原庄）・勝浦庄をなんらかの形でかつての新島庄勝浦地を引き継いだものとみるならば、中湖ないしそれにかかわって設定された勝浦地は古代の篠原郷のどこか、すなわち丈六町より北の現在の那賀川本流沿いの徳島市域南部の地に比定できる。

しかし勝浦川の乱流が広い河口を形成しており、古代の新居郷にあたる現在の小松島市域も河口になっていることにも注意したい。日下雅義氏は古代においては元根井から金磯にむけて砂州が延びており、その後が内湾になっていること、さらに後の芝生川・神田瀬川などになるような勝浦川の分流のいくつかはこの内湾に流入していたことを指摘するとともに、平家物語にあらわれている義経の「かつ浦」上陸の地点として、この内湾の一角に当たる小松島市芝生町旗山に注目している<sup>\*66</sup>。それより以前の八〜九世紀の段階でも旗山周辺に限定されないとしても、この内湾内部のいずれかの場に津が位置し、そこが中湖であったとみることは十分可能である。

前者をとれば篠原郷の広がりをどのように見るにせよ、名方郡により近いところに設定されていることになり、新島庄の四番目の地区としての勝浦地ということに焦点を合わせるならば、新島庄の他の三地区、なにかんずく河口にもっとも近い枚方地区からは数キロしか離れていないことになり、四地区を一括して把握するという点からいってここに中湖という津があったとみるのは不自然ではない。一方後者をとるならば中湖は小松島とする通説に基本的に同じになる。平安末以後小松島が津とし

て発達していたことははっきりしており、ここに古代の中湖という津をもとめることも不自然ではない<sup>\*67</sup>。

いずれに勝浦地区所在地を求めるべきか確証はない。しかしいずれをとるにせよこの地区が郡・郷段階では篠原郷ないし新居郷の海辺の地に所在していることは動かない。さらに津の背後には古墳群も発達している古くから開けている勝浦郡の豊かな平野をもっていることは大豆津がその背後に名方・板野の豊かな平野地帯をもっていたことと同じであることも確認しておきたい。

## 第二節 勝浦地の設定の時期と経営のあり方について

次にこのように中湖という津に設定された勝浦地がどの時点に設定され、またそれがどのように経営（運営）されていたのかについてみていく。

まず設定の時期について、上記承和十一年官符には勝浦地は九世紀半ば時点で昔から「江洲」の地であり圃として地子を取れる状況にないといわれているのみで承和年間を大部さかのぼるといふ以上には特定できない。しかし、天平勝宝八年に三地区が成立した新島庄にこの勝浦地がつけ加えられることで、阿波一国全体の物資の流れをより有効にコントロールできることになるということをみるならば、この勝浦地の成立については天平勝宝八年をさほど下がった時点であるとは考えられない。天平勝宝八年の三地区立券直後から天平宝字年間初頭にかけて、絵図に残っている二地区（枚方・大豆処）についてはさらなる地区内の改修計画が企画されていることをあわせ考えるならば<sup>\*68</sup>、その設定は三地区

立券直後から天平宝字年間初頭にあたる七五〇年代から七六〇年代初頭にかけてのこととみるべきであろう。

設定された勝浦地については、その面積の大きさからみて、たんに船の発着機能だけをもつ地となることを目的に設定されたのではなく、耕地開発も設定の目的の一つにしていたとみてよい。河口の地に水辺に面して設定された「浜」とその背後の水防工事をほどこせば開発可能な微高地とから成り立つ地区として出発したのであろう。設定以後承和年間にはいたるまで「江州」のままであることからみて、設定以後の内部の積極的な開発努力はなされぬまま推移したようであるが、そのことはこの地区が設定以後放置されていたことを意味するのではなく、承和の段階でその面積がきちんと把握されているところからみて、船の発着基地としての利用は継続的になされていたものとみておきたい。

ではこの庄地が設定以後どのような形で開発・経営がなされていたのであろうか。ふたたび八世紀中期の赤穂の場合と対比させると、天平勝宝年間に坂越郷内の海沿いの地に大伴氏の塩山が設定され、それが短期間で失敗した後の造東大寺司の塩山が天平勝宝八年に設定され、以後存続していく。この塩山には造東大寺司から山守使が派遣されてきて、そのもとに当郷比郡比国の人夫すなわち地元坂越郷や他郡・他国から流入してきている製塩技術者が組織される形で塩の生産が行われているのである<sup>\*69</sup>。同時点の新島庄の場合、その開発・生産のあり方はこの赤穂の塩山と基本的には変わらないのであり、阿波の現地への造東大寺司の下級官僚の派遣とそのもとへの必要労働力の組織化がなされたと考えられる。

勝浦地に問題をしばらく、上記で見たように八世紀中期の庄地設定以



後九世紀の承和年間にいたるまで存続しており、庄地がなんらかの形で利用されていること、少なくとも造東大寺司の必要とする諸物資をここを一つの拠点に運漕するという機能は一貫して果たされていることからみて、物資の運漕に必要な労働力の組織化がなされているはずである。以下その組織のあり方について、次の史料とのかかわりで考えてみたい。

# 一、牧裏事

右、依八月三日大風雨、河水高張、河辺竹葉被漂仆埋、但以外竹原并野山之草甚好盛

一、牧子六人、長一人、丁五人

右、率常件人、令見坊守并上下御馬以次祇承、望請於国司詔給牒書、而如常止役、欲得驅使

一、給衣服而欲令仕奉事

右、件牧子等、為貧乏民、其無衣服率仕奉醜

以前事条、具録如件、仍謹請裁、以謹解

天平勝宝六年十一月十一日

知牧事擬少領外従八位下吉野百嶋<sup>\*70</sup>

この史料は古代の牧についての史料として著名でありさまざまな面から分析がなされている<sup>\*71</sup>。そのなかで西山良平氏はこの解状そのものの宛先について第二次文書の検討から紫微中台であるとし、この牧は紫微中台の「家産的性格」が濃厚であり、牒書は「家政」を処理するため要請されたいとする<sup>\*72</sup>。また、山口英男氏は第一条にみえる「大雨風」が『続日本紀』天平勝宝六年（七五四）是年条の畿内を中心にした「雨水」に対応することからこの牧は畿内近国にあると推定し、さら

にこの牧の性格について「令制本来の牧とは異なり、私的性格が強い」とする<sup>\*73</sup>。両氏の指摘と上記の解の第一条で竹原が冠水しているがそれ以外の竹原や草の生育は順調であるという報告がなされているところからみて、この牧は畿内の淀川などの大河川ぞいの河原上に存在する紫微中台の牧であるとしてまちがいないであろう。

署名している吉野百嶋は郡司クラスの地方豪族とみてよいが、この知牧事のもとで実際の労働に従事しているのが、長一人丁五人から構成されている牧子集団である。彼らの労働内容について第二条前半に「A令見坊守并B上下御馬以次祇承」とある。山口氏はBの「上下御馬以次祇承」について、延喜式にみられる国飼馬の制度、すなわち畿内近国に国飼馬を置いて飼育させ、時に応じて貢進させるという制度との関連に注目し、これは国飼馬に類似する形態、必要に応じて京と牧の間で馬を行き来させる形態の存在を示すとされている<sup>\*74</sup>。牧子集団の果たす役割として馬の飼育のみではなく、馬の京と牧との間の往復という役割の存在を指摘していることは重要であるが、この指摘はより発展させるべきであると考ええる。すなわち八世紀末期には長岡京あるいは平安京に近い淀川河原上にさまざまな形態をとった水上・陸上交通の拠点となるべき庄・所が濃密に設定されているのであり、その動きは八世紀半ばにまでさかのぼらせうることをふまえるならば<sup>\*75</sup>、この牧についても、第二条のB（上下）のしめすところは馬そのものの牧と京との間の往来ということのみではなく、某河川を利用した河川交通、川にそったあるいはそれとクロスしている陸上交通などにおいてこの牧を拠点に諸物資の運搬の活動への従事ということをもしめしていると考えたい。つまりこの某牧において牛・馬の飼育を行う（A）とともに、京との間の馬の往

復さらには牧の所在する河川を利用した交通・運輸の労働に従事している(B)のが牧長・牧子の集団なのである。

解の第二条の後半で「望請於国司詠給牒書、而如常止役、欲得驱使」とあり、知牧事が紫微中台にたいして国司に働かけて、「役」を止める(免除する)ようにしてほしいとしている。この「役」の内容について、先にみた駅戸の制度とのかかわりに注意したい。駅戸制度における駅長・駅子の果たす役割と紫微中台某牧の牧子のはたす役割とは、人および物資の移動にかかわる交通・運輸の労働に従事しているという点で基本的に同じである。それゆえに牧子について免除が求められている「役」は徭役ないし課役であったとみてよいのではないか。この免除について、知牧事は「如常」免除してほしいとしているが、これは八世紀半ばの時点で、王臣家・寺社・諸司の庄・所を拠点に交通・運輸に従事する労働力への国家賦課の免除が定着し始めており、ここでもそのような一般的動向にもとづいて免除を求めているとみてよい。

以上の畿内の大河川の河原上に位置する紫微中台の牧における労働力組織のあり方は基本的には新島庄の一地区としての勝浦地における労働力組織のあり方にあてはまる。すなわち同時点の坂越郷の造東大寺司の塩山の場合、山守使のもとに製塩労働力および運搬労働力として「当郷比郡比国」の人夫、すなわち坂越郷の者あるいはそれ以外の比郡・比国(他郡・他国)に本貫をもつ流入者が組織されているのであるが、同様に中湖を拠点に水上交通活動を行う集団が組織される。その構成員としては津周辺の郷・里の構成員で海での活動を生業とするもの、あるいは南海道支道ぞいに本貫を離れてこの津に流入してきて近辺の海での活動を行うものがふくまれていたとみてよいであろう。またその組織のされ

方は駅長・駅子の組織のされ方と基本的に同じであり、駅長に該当する長にはおそらく村里刀祢クラスが起用され、そのもとに駅子に該当する丁が組織されるという形を取ったとみておきたい。なお、大豆津に設置された大豆処地区にも同様な長・丁から構成される交通・運輸に従事する集団が組織されているとみてよく、勝浦地で組織されている集団とあわせて新島庄全体として阿波一国から造東大寺司が必要とする物資の都への運送にあたっていたとみてよいのである。

#### 第四章 水上交通路と庄園―まとめにかえて―

以上勝浦地は新島庄の第四番目の地区として中湖という水上交通路である南海道支道ぞいの津に設定されたこと、その設定の時期は他の三地区の設定の時期とさほど変わらない天平宝字年間頃であり、この地区には交通・運輸に従事する長と丁からなる集団が組織されていたと推定されることをみてきた。以下まとめをかねて新島庄内における勝浦地の位置づけおよび新島庄そのものの水上交通路とのかかわりについてみておきたい。

まず新島庄の庄地の配置のあり方について、因幡国高庭庄との対比で検討してみたい。新島庄の三地区が立券されたのと同年の天平勝宝八年に立券された高庭庄は千代川下流域、鳥取平野の低湿地上に、四つの地区からなる庄として設定されている。四つの地区は湖山池のほとりで鳥取平野の南端に位置する倉見の地に倉見地区が南グループとして、鳥取平野の北端に位置する三川(千代川・湖山川・袋川)合流点に当たる地に郡門地区・奥家地・星田野の三地区が北グループとしてそれぞれ設定

されている。この両グループは湖山池・湖山川を利用した水運で結びつけられているとみてよいが、この両グループの配置のあり方の特質は湖山池に面する鳥取平野の南と北の端の交通の要衝の地を押さえ、それにより因幡国全域からあつまってくる生産物の集積を可能にするような形で庄地の計画的な配置がなされていることである。つまり因幡一国内部の交通のターミナル・センターになっている水上交通の要衝の地に、国内で流通する諸生産物をさまざまな形で集積し、都（東大寺）に送り出す交通・運輸・交易の拠点としての役割を果たすことができるように複数の庄地の設定がなされており、かつその二つのグループは湖山池・湖山川を経由する水上交通路で結びつけられているのである<sup>\*76</sup>。

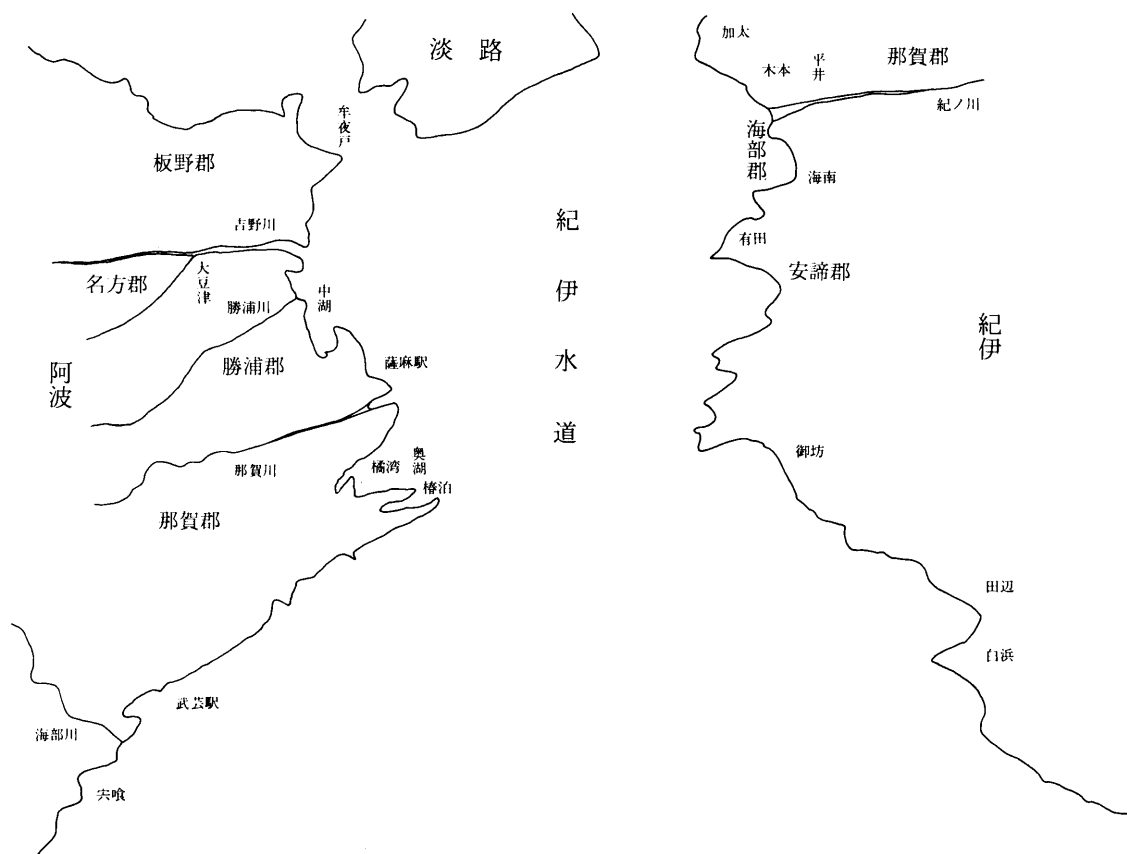
このような高庭庄の庄地配置のあり方をふまえて新島庄の庄地配置のあり方についてみると、先にみたように天平勝宝八年の立券時点の新島庄三地区は阿波国府外港である大豆津を中心に設定されている。これは高庭庄との対比でいえば、鳥取平野の北端の三川合流地点、そこには因幡国の国府外港もおかれていたと推定されている水上交通の要衝の地、に庄地が設定されていたのに対応する。しかし高庭庄でいえば、鳥取平野の南端に位置する倉見地区に対応する庄地が天平勝宝八年時点の新島庄の場合は存在しないのである。高庭庄が因幡国内で果たしているような一国内の物資の集散のコントロールという機能を阿波国内で新島庄が果たすためにはこのような庄地配置では明らかに不十分である。その点勝浦地の中湖への設置のもつ意味は大きい。すなわち庄成立時点で存在した地区は阿波・板野・名方などの郡からなる吉野川流域の物資の集散地に位置しているとみてよいが、新たに中湖に設定された勝浦地は南方の那賀郡の平野地帯からの交通ルート<sup>1</sup>の喉元を押さえていることになり、

高庭庄の倉見地区（南地区）が、鳥取平野南端を押さえるとともに、因幡国南部へのルート<sup>2</sup>の入り口を押さえる場に庄地が設定されていることに対応する。そして大豆処地区が所在する大豆津と勝浦地が所在する中湖の二つの津の間は吉野川・勝浦川下流域の低湿地内部の水上交通路で連絡しているとみてよいであろう。つまり大豆津と中湖の二つの津に庄地が設定されることで新島庄は高庭庄と基本的に同一の構造をもつ庄園になったとみてよいのである。

以上のようにみてくれば、中湖という津への新島庄の一地区の設定は新島庄が阿波でその機能を十分に果たしていくために必然的になされねばならなかったことといえる。すなわち、三地区成立の後になって名方郡境を越えてまで勝浦川河口地帯に第四番目の地区として勝浦地が設定されているのは偶然ではなく、中湖にその設定の場を意図的に求めた結果であったとすべきであろう<sup>\*77</sup>。

このように新島庄が阿波一国内の諸生産物の集約や都への送り出しの機能を果たすために国内の主要交通路上の二つの津にそれぞれ庄地を設定していることをみてきたが、さらにより巨視的に阿波をふくむ紀伊水道沿いの交通路と新島庄とのかかわりについてみるために、天曆四年（九五〇）十一月東大寺封戸庄園并寺用雑物目録に「塩山 五百六十町 三百六十町播磨国明石郡垂水村 二百町紀伊国海部郡賀田村」<sup>\*78</sup>とある、阿波の対岸紀伊に設定されている造東大寺司（東大寺）の加太の塩山との関連についてみておきたい（以下図三参照）。

この塩山がいつ成立したのか、史料がこの雑物目録以外にないため不明である。別に見たように、この雑物目録は当時の東大寺別当光智が庄園回復運動を行っていくために、つまり勅施入庄園の返還を要求するた



図三 阿波・紀伊両国略図  
(紀伊水道に中心を置いた)

めに作成されたものであり、八世紀中期の時点で東大寺（造東大寺司）に与えられた勅施入野占地が書き上げられているものである\*79。その点からみてこの目録に記載されている加太の塩山も八世紀中期の天平勝宝・天平宝字年間に勅施入されて成立したものともてまちはない。またこの塩山の位置についても四至記載がなく不明であるが、従来は加太郷の広がりや古代の加太駅所在地である現在の加太地域に限定して考えてきたことに対応して、現在の加太地域にその所在を求めてきた。しかし和泉山脈が海に向かって延びている小さな半島としての加太地域では塩生産に必要な「浜」も十分にとれないのであり、ここに広大な面積をもつ塩山が所在していたとみるのは無理がある。その点で先にみたように加太郷の広がりが現在の加太から南の海南町まで紀ノ川河口全域に広がっていることをふまえるならば\*80、賀田（加太）村所在の塩山は現在の加太地域より南、紀ノ川に面した前面が海で背後が山になっている地にその所在地を求めるべきであろう。

ただそのようにみた場合、注目しておきたいのは同じ紀ノ川河口に所在する大安寺の墾田地との関連についてである。天平十九年（七四七）二月十一日大安寺伽藍縁起并流記資財帳に「在紀伊国

海部郡木本郷百八十町」とあり、四至は「東百姓宅并道、北山、西牧、南海」となっている<sup>\*81</sup>。先にみたように木本郷は賀太郷の広がり分割り込む形で紀ノ川北岸に存在しており、その地に大安寺の墾田地は前面を海に背後を山にして所在していた。注意すべきはこの墾田地は後の平安時代には東大寺の末寺である崇敬寺の所領木本荘に転化していることである。大安寺から崇敬寺へ移った時期については正確なところは不明である。ただ、十二世紀になってからこの木本荘が勅施入であることが強調されていることからみて東大寺の庄園として相当古くから成立していたことはまちがいない<sup>\*82</sup>。

そのようにみると、大安寺の墾田地の後身としての木本荘と天曆の目録に記載されている加太の塩山とは何らかの形でかわって存在していたとすべきであり、その場合二つの考え方が成り立つ。一つの考え方として、西岡氏が東大寺の塩山を現在の加太地域に所在したことを前提にしてあるが、木本荘の西部の加太庄（塩山のこと）が東大寺領であることが同寺が木本荘の本家となるにあたって一つの役割をもったということを指摘していることをふまえて<sup>\*83</sup>、東大寺の加太の塩山は紀ノ川に面した場に所在したのであるが、その具体的な所在地は木本荘に隣接しないしは近接している現在の木本地域近辺とみる見方である。もう一つの見方として、赤穂の坂越郷で伴氏が設定した塩山が数年で荒廃し、その後に造東大寺司が進出してきて塩山を再設定したと同じように、天平勝宝・天平宝字年間に大安寺の墾田地が十分定着せぬままに荒廃したあとに造東大寺司（東大寺）が進出してきて、その地をそのまま塩山にしたのであり、それが天曆の目録には加太の塩山として記載されるとともに、平安時代になると別称木本荘として末寺の崇敬寺の庄になった

とみる考え方である。

いずれをとるべきか確証はないが、八世紀中期の時点で大安寺墾田地と造東大寺司の塩山の両占点地が紀ノ川河口地帯の現在の木本地域を中心とした地域、背後が和泉山脈で前面が紀ノ川河口の低湿地および水面になっている地域に、重なってか近接しない隣接して所在していたことは動かないものと考ええる。額田雅裕氏は木本荘のおかれた場について、ラグーン性低地に所在し庄園としての本格的な開発は一一世紀中期から一二世紀初頭にかけてなされたのであり、それ以前の八世紀の大安寺墾田地が設定されていた時点では塩田常荒田の状態すなわち塩分の抜けた陸地ではなく湿地の状態にあったとしているが<sup>\*84</sup>、この状態は大安寺墾田地とずれて存在したとしても、造東大寺司の塩山のおかれた状況でもあったのである。

そして大安寺の墾田地の四至の西すなわち紀伊水道よりの部分が牧になっていることに注意したい。先にみたように畿内大河南の河原上に位置した紫微中台の某牧が交通・運輸の拠点としての役割を果たしていた。大安寺の墾田地が前面が湿地ないし水面になっている地に所在していたとすれば、それに隣接するこの「牧」が同じように牛馬の飼育の機能とならんで何らかの形で交通・運輸の拠点としての機能を果たしていたとみてよいものと考ええる。

このようにこの牧を木本地域に所在する津にかかわって設定されている牧とみなした上で、この木本地域の津について以下の二点に着目したい。まず紀ノ川河口地帯における木本津の位置づけに着目したい。額田氏も指摘しているように、古代の紀伊湊は紀ノ川河口に近い吉田から平井付近にあったとされている<sup>\*85</sup>。この紀伊湊所在地の背後の地が紀伊

国府を含めた紀伊の中心地帯である。そして木本も平井も和泉山脈を後背にしているが、木本の方が平井よりさらに紀ノ川河口寄りに位置している。その点でいうと木本津は紀ノ川河口をややさかのぼる紀伊国の中心部分から離れた紀伊水道近くの低湿地上に位置する津ということになる。

次に木本地域の津と紀伊水道沿いの交通路とのかかわりということで、二条大路木簡に「・紀伊国安諦郡駅戸桑原史馬甘戸同広足調塩三斗・天平四年十月」<sup>\*86</sup>という木簡が出土していることに注目したい。『和歌山県史・原始古代編』はこの木簡にあらわれている駅を紀ノ川北岸を走り加太駅に達する南海道の駅とみなし、駅戸の広足は駅から遠いところに居住する駅戸とみなしている<sup>\*87</sup>。しかし安諦郡（後の在田郡）と南海道との間は遠距離であり、この駅戸を南海道沿いの駅の駅戸とみるのは不自然といわざるをえない。やはり安諦郡内に所在する駅の駅戸とみなすのが自然である。そして安諦郡が紀伊水道沿いであること、さらにこの駅戸が調として塩を貢納していることをふまえるならば、この安諦郡所在の駅は対岸の阿波国那賀郡の薩麻駅・武芸駅と同じく紀伊水道に面する津に設定された水駅とみるべきではないか。つまり正史をふくめ他の史料にはあらわれていないが天平四年（七三二）の段階では紀伊水道沿いの海部郡・安諦郡などの津に設定された水駅を結ぶ水上交通路の存在をみておいてよいであろう。以上の推測が成り立つのであれば、木本地域の津は加太を出発点にして南に延びる駅路道上の駅の置かれた津の一つとみてよいことになる。

以上のようにみた上で加太に設定された塩山にもどると、この塩山が大安寺墾田地と同一であれば、それはこの木本津にかかわって設置さ

れていたことになるし、両者異なった存在であるとしても近くに設定されていることは動かないから塩山はやはり木本津に何らかの形でかわって設定されているものとみてよい。またそうなれば、前面が海で後背が山になっている塩山が津にかかわって設定されているという点でこの加太の塩山は先にみた八世紀中期に設定されている赤穂の造東大寺司の塩山と全く同じとみてよいことになるし、その経営のあり方も赤穂の塩山と同様に津を拠点に活動する諸労働力を組織しつつ製塩労働や塩の搬出活動が行われたとみてよいことになる。

そしてこの紀ノ川河口地帯の木本の津と平井の津のあり方と、阿波の吉野川河口地帯における大豆津と中湖という二つの津のあり方は極めて類似している。すなわち吉野川河口から少しさかのぼったところがあり、阿波国府にも近く名方郡と板野郡の平野という阿波国の中心部分を背後にもつ大豆津と勝浦川河口に位置し南海道支道沿いの津である中湖との関係は、そのまま紀ノ川河口地帯における国府など国の中心に近い平井の津と紀伊水道沿いの津である木本の津との関係に対応するとみてよい。さらに紀伊水道をはさんで阿波国の側に撫養から土佐に達する水駅の連なりとしての駅路道（南海道支道）が、紀伊国側に加太から紀伊水道ぞいにどこまで達するかは不明であるがやはり水駅の連なりとしての駅路道が、それぞれ延びていることも同様である。

全体として紀伊水道沿いの水上交通路の存在とその交通路に向けての両国の心臓部に位置する津からの連絡水路の存在という点では、八世紀前・中期の紀伊水道をはさんだ阿波・紀伊両国の水上交通路の発達の状況は全く同じ様相を呈しているとしてよいのである。しかもそれぞれの駅路道の出発点である撫養と加太とは淡路を経由して海路で結ばれてい

るとみてよいから、両国の水上交通路は阿波・紀伊・淡路三国にまたがり紀伊水道をとりまく形で走る高度に発達した水上交通路の一部を形成していたということにもなる。そして阿波国の新島庄および紀伊国の加太塩山はいずれもがこの紀伊水道をとりまく水上交通路にかかわって設定されているのである。

別稿でもみておいたように<sup>\*8</sup>、八世紀中期に進行する造東大寺司の山陽・山陰・南海諸道における庄園設定は瀬戸内航路を中心に最後は難波の新羅江庄に達するような形で一国一庄園を基本にしてそれぞれの国の水上交通路の要衝の地に系統的に庄園を設定するという形がとられる。新島庄や加太の塩山も巨視的にはその一環として設定されているのであり、とくに紀伊水道沿いの水上交通路の高度な発達に依拠することで設定がなされているのである。具体的には新島庄は阿波一国内の物資を集積することを一つの目的に阿波の北部の平野地帯の中心的な津の二つである大豆津と中湖とに庄地が設定される。ここに集積された物資は撫養津に送られ、そこから海を越えて加太駅に送られる。そしてこの加太駅には紀伊国側の紀伊水道ぞいの水上交通路を経由して木本津にかかわって設定されている造東大寺司の塩山からの製品が運ばれてくるのであり、ここから大阪湾ぞいに難波津の新羅江庄に向けて運漕されていたのであろう。

\*1 新島庄については、拙稿「古代の大河川下流域における開発と交易の進展―阿波国新島庄をめぐって―」（『徳島大学総合科学部紀要六巻（人文・芸術研究篇）』、一九八九年）を参照。

\*2 寛和三年（九八七）二月一日東大寺家符案（大日本古文书東大寺文书之二（東南院文书之二）、五三四（以下、東南院文书二一五三四のごとく略する））に、「寺

家符阿波国新嶋・勝浦・枚方等庄々」とある。

\*3 承和十一年（八四四）十月十一日阿波国牒（東南院文书二一五三二）。

\*4 承和年間に東大寺が行った庄園回復運動については、拙稿「低湿地開発の進展と庄園回復運動―九世紀の阿波国新島庄―」（『徳島大学総合科学部人間社会文化研究第二巻、一九九五年』）でその一端を分析した。

\*5 新島庄を構成するもう一つの地区である枚方地区についてはこの牒にあらわれていないが、これは地区内耕地についての官省符による寺田としての確認と返還が承和七年段階ですでになされているゆえである。詳しくは前掲注4拙稿参照。

\*6 後に掲げる図二参照。

\*7 東南院文书三一五九七。

\*8 「延喜式卷二十八兵部省諸国駅伝馬」（『新訂増補国史大系交替式・弘仁式・延喜式』、七一五頁）。

\*9 藤岡謙二郎編『古代日本の交通路3』第七章第三節「阿波国」、服部昌之執筆、一九七八年。

\*10 『純日本紀』養老二年（七二八）五月庚子条。

\*11 『日本後紀』延暦十六年（七九七）正月甲寅条に、「廢阿波国駅家□、伊予国十一、土佐国十二、新置土佐国吾椅舟川二駅」とあり、このときに阿波・土佐にまたがる南海道支道が廃止されたとみてよい。

\*12 藤岡謙二郎編『日本歴史地理総説古代編』4山陽・山陰・南海一四三頁、金田章裕執筆、一九七五年。

\*13 石隈駅と同じ場であるのか、あるいは位置がずれているのか、また名称がなんであったかなどについては不明である。

\*14 大豆津の阿波の水上交通においてしめる位置の重要性については前掲注1拙稿を参照。なお、大豆津の位置については図二を参照のこと。

\*15 松原弘宣『古代の地方豪族』、一九八八年、一三七頁。

\*16 奈良国立文化財研究所編『平城京発掘調査出土木簡概報（十九）』、一九八七年、二五頁。

\*17 同木簡概報（十九）、五頁。

\*18 同木簡概報（十九）、三二頁。

\*19 平城京発掘調査出土木簡概報（二十二）―二条大路木簡一―、一九九〇年、三

- 九頁。
- \* 20 渡辺晃宏「二条大路木簡の内容」(奈良国立文化財研究所編『長屋王邸宅と木簡』、一九九一年、一三二頁)。
- \* 21 岡泰「海部路「薩麻駅」について」(『ふるさと阿波』一五二号、一九九二年)。
- \* 22 同誌部落史編、一九七三年、一三頁。
- \* 23 安曇部氏と鷯甘部氏について、前者については『三代實録』貞観六年(八六四)八月壬戌条に阿波国名方郡に安曇部粟麻呂に安曇宿禰を賜うという記事があり、名方郡などに存在していたことが判明していたが、この木簡で那賀郡でも活動していたことが明らかになった。後者については阿波における所在はこの木簡で始めて明らかになった。
- \* 24 この図は『角川地名大辞典・徳島県』一〇五六―一〇五七頁に掲載されている福家清司氏作成の「古代郷名分布推定図」をもとにそれに補訂を加えて作成したものである。
- \* 25 池辺弥「和名類從抄郡郷里駅名考証」、一九八一年、六七〇―七二頁参照。
- \* 26 『角川地名大辞典・徳島県』、一九八六年、「原へ那賀川町・羽ノ浦町」の項目参照。なお、図二も参照。
- \* 27 平城京発掘調査出土木簡概報(二十一)―長屋王木簡一、一九八九年、三三頁。
- \* 28 奈良国立文化財研究所『平城京木簡一解説』、一九六九年、四三頁。
- \* 29 寺崎保広「長屋王家木簡」(『長屋王邸宅と木簡』、七六頁)。
- \* 30 平城京発掘調査出土木簡概報(二十二)、三九頁。
- \* 31 福家清司「阿波中世水運史小考」(三好昭一郎先生還暦記念論集刊行委員会編『歴史と文化―阿波からの視点』、一九八九年所収)参照。
- \* 32 吉田東吾著、一九〇七年。
- \* 33 和射郷・海部郷の比定については、『角川地名大辞典・徳島県』の「和射郷」・「海部郷」の項に従来の説が詳しくまとめられている。なお、図一参照。
- \* 34 平城京発掘調査出土木簡概報(二十七)―長屋王家木簡四、一九九三年、二頁。
- \* 35 奈良国立文化財研究所『平城京木簡二解説』、一九七五年、一〇九頁、木簡番号二一八三。
- \* 36 同上注(35)『平城京木簡二解説』、一五頁。
- \* 37 「延喜式卷十神祇神名下」(『新訂増補国史大系交替式・弘仁式・延喜式』、三百九頁)に那賀郡七座の一つとしてあらわれている。
- \* 38 「阿波国風土記云、奈佐浦」(『日本古典文学大系・風土記』、四九二頁)。
- \* 39 「角川地名大辞典・和歌山県」の「海部郡」の項による。
- \* 40 一九九四年刊、三三四頁。
- \* 41 『和歌山県史・原始古代編』によると、「□□郡可太郷黒江里戸主神奴与止麻呂調塩三斗 神龜五年九月」となっている(同上、三三四頁)。
- \* 42 『和歌山県史・原始古代編』三三五頁。
- \* 43 阿南市福井町椿地の弥勒堂にある「線刻弥勒菩薩座像」に以下の文字が刻まれている。「阿波国海部郡福井里大谷内ノ奉造立当来生人安住仕ノ弥勒菩薩□寿永四年乙正月二十八日己ノ願主藤原満量為女藤原」。なお、寿永年号は寿永三年(一一八四)四月に改元されて元暦にかわるから、ややずれがある。ただ、全体として疑うべき要素はない。徳島県教育委員会編『徳島の文化財』(一九九二年、一一六頁)に写真と解説が掲載されている。
- \* 44 『阿南市史』第一巻、一九八七年、一四九頁。
- \* 45 図一にその広がり方をそれぞれ(和射郷)(海部郷)として記入しておいた。
- \* 46 前掲注24参照。
- \* 47 『和歌山県史・原始古代編』三三六頁参照。
- \* 48 大山誠「古代駅制の構造と変質」『史学雑誌』八五―四、一九七六、大日方克己「律令国家の交通制度の構造」『日本史研究』二六九号、一九八五、その他を参照。
- \* 49 「令義解卷八厩牧令」(『新訂増補国史大系律・令義解』二七五頁)。
- \* 50 坂本太郎「水駅考」(同氏『日本古代史の基礎的研究 下制度編』一九六二年)、新野直吉「令制水運の実地研究」(『日本歴史』一八四号、一九六三年)、松原弘宣「水駅について」(同氏『日本古代水上交通史の研究』一九八五年)。
- \* 51 『新訂増補国史大系交替式・弘仁式・延喜式』七二三頁。
- \* 52 松原弘宣氏注(50)著書参照。
- \* 53 『日本古典文学大系・風土記』、四九二頁。なお、奥湖は写本では「咲湖」と書かれている。日本古典文学大系の校訂に従い、奥湖とした。
- \* 54 『阿南市史』第一巻一七四頁、『角川地名大辞典』七九二頁など参照。
- \* 55 『日本古典文学大系・風土記』、四九二頁の頭注による。



- \* 56 赤穂については、『赤穂市史』第一巻、一九八一年、第三章第二節「律令制下の赤穂」5「駅制と水運」、同第三章第三節「庄園の展開」3「庄園の成立と赤穂荘」、および拙稿「九世紀における大土地所有の展開」（『史林』五〇・四、一九六七年）などを参照。赤穂についてはあらためて詳しい分析を行う予定にしている。
- \* 57 延暦二年（七九三）四月一七日播磨国坂越・神戸両郷解（平安遺文一一九）および上掲赤穂市史第一巻参照。
- \* 58 『平城宮木簡一解説』、一三九頁、木簡番号四〇三。この木簡はSK八二〇から出土している、総数四六点を数える贄物の荷札の一つである。その大半は参河国播磨郡篠島および析島の海部が貢進している贄に付されたものであり（木簡一解説五三頁）、天平年間末年作成のものと推定されている（同一三四頁）が、残りの荷札で年号が記されているのは全て天平一七〜一九年のものである（同二三八〜一四〇頁）。このことからみて、この撫養にかかわる木簡も天平一七年〜一九年ごろ作成されているとみてよいものと考ええる。なお、鬼頭清明氏はこの「海」について、「あま」と読み、五〇戸一里制に組み込まれていない海部集団と解した（同氏「御費に関する一考察」（竹内博士古希記念会編『続律令制国家と貴族社会』一九七八年）。これにたいして東野治之氏は『丹後国風土記』にあらわれる「与謝海」などと同じく撫養の海を指す地名とみてよいとする（同氏「志摩国の御調と調制の成立」同氏著『日本古代木簡の研究』、一九八三年）。この場合は東野氏の指摘するように地名として読むのが正しいと考える。
- \* 59 奈良国立文化財研究所編「藤原宮木簡一解説」、一九七八年、七七頁、木簡番号一五三に「板野評津屋里 猪脯」とある。
- \* 60 義解に「謂、船有大小、故随船配人、令必堪行、若必水陸兼送者、亦船馬並置之」とある。『新訂増補国史大系律・令義解』二七五頁参照。
- \* 61 延喜式にはこのルートがあらわれていないが、これは八世紀末にこのルートが廃止されたゆえであろう。ただ、一〇世紀になってから、土佐国守の紀貫之は海路土佐から阿波をへて都にもどっているが（『土佐日記』）、この際利用したルートは土佐から船で土佐・阿波の陸地にそって土佐泊（現鳴門市、小鳴門海峡すなわち牟夜戸に面している）に達するものであり、あきらかに八世紀末には廃止されている北海道支道そのものである。つまり、古代全体を通してこの阿波と土佐とを結ぶ水上交通路は駅が設定されているといえないにかかわらず、一貫して重要な交通ルートとして機能しているのである。なお、以上の本章の分析の要点はすでに拙稿「カイフ（海部）とソラ（空）の世界」（三好・高橋編『図説徳島県の歴史』所収、一九九四年）のカイフの項で述べた。ただ、詳しい論証過程を省略しているため、あらためて本稿で新出の木簡を中心にすえて分析を行った。
- \* 62 天曆四年一月二〇日東大寺封戸庄園并寺用雜物目錄（東南院文書二一五四五）に「阿波国百戸：板野郡五十戸斗、：那賀郡五十戸斗、：」とあり、板野郡と那賀郡にそれぞれ五〇戸の東大寺封戸があったことがしめされている。
- \* 63 村岡良弼著、一九〇三年。
- \* 64 注（32）参照。
- \* 65 以上の勝浦郡の中世庄園のあり方については、詳しくは『角川地名大辞典・徳島県』の「勝占」「勝浦郡」「篠原」の諸項目、および『国立歴史民俗博物館博物館資料調査報告書6・日本庄園データ2』（一九九五年）の阿波国勝浦郡諸庄園の項目を参照。
- \* 66 同氏「小松島平野と港の変遷」（寺戸恒夫編『徳島の地理』、一九九五年、所収）。
- \* 67 図二上にAおよびBと記入したのが、勝浦地ないし中湖の二つの推定所在地である。なお、この図二については拙稿「低湿地の庄園・新島荘」（『図説徳島県の歴史』所収）に掲載した「新島荘略図」を一部補訂したものである。
- \* 68 このような既設三地区の立券直後における改修計画の作成ということは二枚の絵図の分析を通してあきらかになるが、これについては別稿で考えてみたい。
- \* 69 注（56）および（57）参照。
- \* 70 知牧事吉野百島解（『大日本古文書巻之四』、三一頁）。
- \* 71 西岡虎之助「武士階級結成の一要因としての牧の発展」『庄園史の研究』上巻、一九五三年）、西山良平「家牒・家符・家使―律令国家の側面―」『日本史研究』二一六号、一九八〇年、山口英男「八・九世紀の牧について」『史学雑誌』九五一、一九八六年など。
- \* 72 西山注（71）論文二三頁。
- \* 73 山口注（71）論文二三頁。
- \* 74 山口注（71）論文二九頁。
- \* 75 八世紀中期における畿内の大河川河原上に展開する庄・所については別に分

析する。

- \* 76 高庭庄については、拙稿「古代における水上交通と庄園のかかりについて——因幡国高庭庄を中心に——」（『徳島大学総合科学部紀要第六巻（人文・芸術研究篇）』、一九九三年）を参照。

- \* 77 なお、このような大規模な庄地設定への粟凡直氏のかかりについて注目しておきたい。新島庄と同時期に成立した高庭庄の場合、国造勝磐が成立期の庄の開発・経営に大きな役割を果たしていた。阿波国造である粟凡直氏が新島庄地の設定とその内部の開発と経営に深くかかわっていたことを直接しめす史料はない。ただ、宝亀十一年（七八〇）二月一日西大寺資材流記帳（寧楽遺文中巻宗教編）によると、西大寺の庄園が板野郡に設定されている。時期は明示されていないが七六〇年代であろう。そしてこの庄園は粟凡直国継が献じたものである。粟凡直氏は吉野川下流域の名方・板野郡にその勢力を張っており、西大寺の庄園と時的にもさほど変わらずに設定されている東大寺の新島庄においても粟凡直氏が同様にかかわっていたとみてよいものと考ええる。ただ、勝浦地の設定については、その場が名方郡の境を越えた勝浦郡に所在するので、そこまで影響を及ぼしたかどうかは疑問なしとしない。しかし、成立期新島庄全体へのその影響力の大きさを考えるとやはり粟凡直氏がこの地の設定にも関与していたとみておきたい。なお、粟凡直氏については拙稿「粟凡直若子と古代の名方郡」（『阿波一宮城』編集委員会編『阿波一宮城』、一九九三年、所収）で触れておいた。

- \* 78 東南院文書一一五四五。

- \* 79 拙稿「八〜十世紀の阿波国新島庄について」（松岡久人編『内海地域社会の史的研究』、一九七七年）。

- \* 80 注（40）参照。

- \* 81 寧楽遺文中巻、宗教編上。

- \* 82 木本庄については、西岡虎之助「東大寺領紀伊国木本荘」（同氏『荘園史の研究・下巻一』所収、一九三二年）などを参照。またこの庄が勅施入庄であることの強調は、たとえば康和四年（一一〇二）五月二十六日東大寺政所下文（平安遺文四一一四八三）などを参照。

- \* 83 西岡氏前掲論文二二八頁参照。

- \* 84 額田雅裕「荘園の立地と環境」（日下雅義編『古代の環境と考古学』所収、一

九九五年、二二五〜二二六頁）。

- \* 85 額田氏前掲二二七頁。

- \* 86 『平城京発掘調査出土木簡概報二十四―二条大路木簡二―』、一九九二年、三〇頁。

- \* 87 『和歌山県史・原始古代編』三三五頁。

- \* 88 拙稿「瀬戸内型の庄園」（『新版古代の日本④・中国・四国』所収、一九九二年、三九九〜四〇五頁）参照。